

トピックス 太極拳祭は5月21日(日)開催

第18回となる、中野完二先生一門による「太極拳祭」は、5月21日(日)に、台東区リバーサイドスポーツセンター体育館で開催されます。申し込み受け付け中です。

日時；5月21日(日)10時～16時 参加費；3000円 【記念Tシャツ、弁当、飲み物つき】

北地域交流会は6月10日(土)に決定

恒例の北地域の交流会は、今回は野外ではなく、台東区リバーサイドスポーツセンター体育館(4階競技場)で、6月10日(土)午後1時30分から4時まで行われることに決まりました。参加費無料。服装自由。(土足厳禁、上履きかはだし。)追って参加者を募ります。

瑞江鶴の会は4月から新体制で

『瑞江鶴の会(指導；茶木登茂一)』は、4月から茶木が第1週を担当し、残りは宇留野良子師範が担当するように指導体制を変更します。これは来年度から完全に宇留野師範にバトンタッチするための経過措置として、会員の皆さんのご了解のもとに実施するものです。

正直な話として、火曜日は午後の亀戸SC教室との掛け持ちで体力的にきつくなったことが理由の一つですが、瑞江鶴の会の数多い師範の方々の将来のために、新規教室を別途開きたいという構想もあってのことです。この方は「中国歴史文化勉強会」の終わる秋以降を考えております。

東大島鶴の会本部道場で10周年記念稽古

『東大島鶴の会(指導；茶木登茂一)』では創立10周年記念行事の一つとして、さる3月24日(金)に、本部道場大稽古場で記念稽古を行いました。当日は33名が参加し、10時から、まず、楊名時師家のお写真にご挨拶をした後、カリキュラムに従っていつもの通

りの練習を行い、休憩時間には茶木が「楊名時師家の偉大な足跡」と題してお話をしました。終了後は席をKKRホテルに移して、記念昼食会を開いて、当会の10周年を賑やかに祝いました。【写真右】



早朝太極拳の会・年度末表彰

清新南ハイツプロバンス会主催の『早朝太極拳の会(指導；茶木登茂一)』は、27年度51回の練習にすべて参加した、降旗昭さん、高瀬みよ子さん、のお二人に皆勤賞を差し上げました。

閑人閑話 「写楽」は「北斎」だ！

昨年11月にオープンした「すみだ北斎美術館」へ、ようやく3月3日に行くことが出来ました。

生誕した“本所割下水”の地にこんなモダンな美術館が出来たと知ったら、終生貧乏長屋暮らしだった北斎は“俺には似合わないよ”と、あの世で苦笑しているかもしれませんが、世界的に評価の高い北斎に、ようやくこのような立派な展示施設、情報発信基地が出来たことはたいへん嬉しいことです。【右；北斎美術館の全景 2017.3.3 写す】



北斎は一言でいえば、天才にして奇人、と言えるでしょう。生涯に93回引越した、雅号を30回変えたなどと言われていますが、金銭や日頃の暮らしにもまったく無頓着で、ごみや食べ物の残りの散らかる中で画業に没頭していたそうです。大名、外国人、歌舞伎の名優、といえども気が向かないと仕事を引き受けなかった、あるいはトラブルを起こした、などの話も残っています。

しかし、画業については常に探究心が旺盛で、人間を描くために名倉接骨院に弟子入りして、人間の筋骨の勉強をしたとか、これも奇人で有名な司馬江漢から銅版画の技法、西洋画の遠近法の技法を学んだりもしています。終生、新しいジャンルに挑戦し、多彩で、インパクトの強い、また謎やトリックに富んだ作品を次から次ぎへと生み出していったエネルギーはすさまじいものです。

実は、北斎についての私の最大の関心事は、「写楽」は実は「北斎」ではないかという案件です。通説としては、「写楽」は土佐の能楽者「斉藤十郎兵衛」とされていますが、これはたいへん可笑しな説なのです。この説の論拠は、斉藤月岑が50年あとに書いた「増補浮世絵類考」で“江戸八丁堀に住む、阿波侯の能役者”と書いたことが唯一の根拠となり、その後、八丁堀に斉藤某が住んでいたこと、また、阿波の能役者であったことなどが確認されたとして、次第に通説となったものですが、月岑自身も伝聞でそう書いているだけですし、肝心の、斉藤十郎兵衛が浮世絵画家であったのか、また、それを証拠立てる絵が残っているかなど、つまり、美術的な面での証明は全くないままの通説なのです。とても素人が書ける絵ではありませんし、版元との密接な関係なしには版画にはなりません。しかも、“阿波の斉藤十郎兵衛”に戸籍捏造説もある状況です。

ですから、依然として“写楽はだれか論争”があるわけで、歌麿、豊国、司馬江漢、葛屋重三郎（版元）、酒井抱一、などなどの名前が過去から挙げられているわけです。

しかし、①写楽は北斎や歌麿と並んで、最高レベルの浮世絵師である。②写楽の役者絵は従来の役者絵のブロマイド的な領域を突き抜けて、演じる役者の生々しい姿をまさに“ライブで”、遠慮なくデフォルメしてグロテスクなまでに描いている③表に出たのは寛政6年（1794年）5月から翌年3月までの10か月間だけで突然姿を消している。

ということから考えると、北斎こそが写楽であるという説がきわめて現実的になってくるのです。北斎は、19歳で勝川派に入門して「勝川春朗」の名のもとに、15年も役者絵を描いていましたが、寛政6年（1794年）に師匠の死をきっかけに兄弟子ともめて破門されます。そののち、寛政7年（1795年）には「北斎宗理」と名乗り、さらに「葛飾北斎」と名乗るようになります。まさに「春朗」から「北斎」へ変わる狭間の短い期間に「写楽」が活動したわけです。「北斎」は“やぼくさい”、“あほくさい”からの発想であり、「写楽」は“しゃらくさい”からの発想であると考え、北斎その人のウイットに富んだ命名であることもよくお分かりいただけると思います。頻々と雅号を変えるようになったのも、春朗返上後のことです。

そもそも、写楽の作品はあまり評判がよくなかったのも、版元の葛屋が短期間で打ち切っただけの話だと思います。写楽じつは春朗も、素知らぬ顔で、北斎という新しい雅号で、技法を、ジャンルを変えて、同じ版元で再び描きつづけたというだけのことです。北斎にとっても、葛屋にとっても、写楽は忘れられても痛くも痒くもなかったのです。ちなみに、日本で写楽が評価されたのは、

“当時ではなく！”、明治になって、西欧ですごい評価を得てののちのことです。

私は浮世絵については素人同然ですが、それでも、役者絵について、春朗、写楽、北斎の各作品を比べてみれば、その類似性に、また素晴らしい表現力と技法に気付くことができます。

(「写楽＝北斎」説については美術史家の田中英道先生、浮世絵コレクターの中右瑛(なかう・えい)先生などのお説を参考にさせていただきました。)

この『写楽は北斎だ!』のテーマで企画展を開いたら、ぜったい受けるのではないのでしょうか?!

“世界の写楽”はやはり“世界の北斎”でなければいけません、というのが私の思いです。

左顧右眄 第19話 『黄河を辿る その1』

『左顧右眄』の第19話として、「黄河」を取り上げることとしました。

黄河は長江と並んで、世界有数の大河です。流域は中華文明揺籃の地とも呼ばれます。ここで幾多の王朝の盛衰があり、また異民族との果てしないせめぎ合いの歴史もありました。また、同時に黄河は豊かな水利をもたらしてくれる恵みの大河であり、繰り返し繰り返し大水害を起こす災害の大河でもあります。

この黄河の源流域から河口までを辿るという形で、黄河についてのさまざまな話題を、私の勉強会でまとめました原稿をもとに、今月以降、7~8回に分けてお話しします。

1. 黄河とは

黄河と言う河川の概要を「利根川」のデータとの比較でご紹介します。

項目	黄河	利根川
全長	5, 464 km	322 km
流域面積	745, 000 km ²	16, 840 km ²
平均流量	1774 m ³ /S	290 m ³ /S
水源の標高	4, 800m	1, 831m
源流地と河口	青海省⇒山東省	群馬県⇒茨城・千葉県境

下の黄河流域図を見ていただくとお分かりいただけるように、黄河は中国の北部を西から東へ横断する形で、チベット高原、黄土高原、銀川平原、オルドス・ループ(屈曲部)、河北平原(堆積



平野)など、標高も、気象も、地形も、民族も異なる地域を大きく蛇行しながら延々と流れて、山東省で渤海に注ぎます。途中黄土高原で、大量の泥を取り込みますので、世界でも類のないほど“濃い重い水”の川です。水1トン当たりの泥砂の含有量は以下のとおりで、黄河は抜群に濃く重いことがお分かり頂けると思います。

黄河; 37.6 kg 長江; 0.4 kg ナイル川; 1.6 kg アムール川; 2.3 kg

のちに詳しくお話ししますが、いわゆる河北平原とはすべて黄河の運んできた泥砂の堆積によって生まれたものなのです。

2. 源流部

黄河の源流域は、青海省の中央にあるバヤンカラ山脈の北側にあるとされていますが、右図のようにAからEまでどれを本源流と特定するかについて、いろいろな議論があった末に、扎



陵（ザーリン）湖、鄂陵（オーリン）湖にそそぐ何本かの支流のうち、卡日曲（カルチャー）が本源流であるとようやく結論付けられたということです。

また、大きい地図で見ると分かりますが、上のD, E地点の分水嶺のすぐ南には通天河（金沙江・長江・揚子江）の一流源があるのですから面白いものですね。

黄河の源流がどこかについては、李白もいみじくも“君知るや黄河の水、天上より来たりて…”と詠っているように、古くから漢民族の関心の的でした。ちなみに唐時代には源流部は中國の領土ではなく、吐蕃（チベット）の領土であったわけです。

紀元前4～5世紀、春秋時代末期から戦国時代にかけて、漢民族の多くは黄河下流域に住んでいました。『淮南子』「地形訓」には“河水（黄河）は崑崙山の東北の隅から発出して…”とあります。（ただし、この時代には崑崙山が具体的にどこにあるかは特定されていません。）中国最古の地理書『書経』には黄河の源流を積石山（しせきさん・アムネマチン 6282m）と思わせる記述がありますが、いずれにせよ実際の源流よりはかなり手前に想定していたようです。

漢の武帝の時代に、はるばる中央アジアの月氏国まで遠征した張騫（ちょうけん）は、帰路タリム盆地のタクラマカン砂漠で東流するタリム川がロブノールで途絶えていることを見て、帰国後、崑崙山⇒ホータン川⇒タリム川⇒ロブノール、そしてそこから伏流して、再び積石山で地上に出てきて黄河になるという説を唱えました。（ロブノールの標高は800mで、積石山付近の黄河の標高は3000mぐらいですから、今となつては、これはまったく荒唐無稽な説であることは明らかなのですが、当時は一つの説として、信じられていたということのようです。）

その後実際に源流部を知る羌族（チベット系少数民族）などから、源流は「星宿海」にあるという説も伝えられるようになってきたということです。「星宿海」は前頁の地図の扎陵（ザーリン）湖の西に広がる湿地帯で、小さな池塘が無数にあって、月夜の夜などはまるで地上に星空を見るようだところから名づけられたロマンチックな地名ですが、現在では干上がっているようです。

話を少し端折れば、唐の時代には、ほぼ正確な位置が推定できるようになり、その後も時代時代に調査が行われてきました。新中国になって1952年に、また1978年に大規模な調査が行われて、ようやく上記のような結論になったということです。（以下次号に続く）

旅をうたい拳を詠む 世情まんだら

英語では「ファーストレディ」と呼ぶ人を私人と言うはちょっと無理筋
風邪？花粉？それとも謎の顔隠し？街にあふれるマスク星人
白モクレン咲けば哀しくよみがえる六年前の惨禍の映像
きわどくも瀬戸際の危機乗り越えて再度の勝利にとどろく歓声

（横綱稀勢の里の逆転優勝を祝って、名前を読み込んで詠いました）